

じてんしゃは のりものです。

りんごは くだものです。

いぬは どうぶつです。

一つのをなにかまわけのことばで説明しています。

えんぴつは かくものです。

おなべは りょうりに つかいます。

かさは あめにぬれないように つかいます。

一つのをつかい方で説明しています。

ぞうの みみは おおきい。

ぞうの はなは ながい。

キリンの くびは ながい。

かばの あしは みじかい。

一つのを比較のことばで説明しています。

そらが あおい。

うみは あおい。

ひとつのを色のことばで説明しています。

りんごの絵カードを見て

「りんご」について話をします。

「色は」「形は」「味は」などを話します。

そして文で表現をします。

「りんごは あかい。」

「りんごは まるい。」

「りんごは おいしい。」

つぎに「これはどんなりんごですか？」と問います。

答え方のモデルとして

これは「あかい りんご」です。

と教えます。

できれば書いて見せてあげればいい。
そして「これはどんなりんごですか? 」と問います。
これは「まるい りんご」です。
これは「おいしい りんご」です。
モデルをまねして、答えを促します。

場所の絵カードを見せます。
どこにいきますか?
と問います。
やまに いきます。
2 かいに いきます。
ゆうえんちに いきます。
うみに いきます。
いえに いきます。
びょういんに いきます。
そして次に、同じ絵カードを見せて
「いきます」を使いません。
よく聞いて答えてね。
と話し、問います。
どこにのぼりますか?
どこにあそびにいきますか?
どこにかえりますか?
どこにいそぎますか?
問いに対応する答えを求めます。
もう一度絵カードを見せて、お話ししてくださいと指示します。
おとこの ひとが やまに のぼります。
と例を示すのもいいです。
文を書いたカードを読ませてあげるのもいいです。
読んだ後、だれが? どこに? どうしますか? と問い直すのもいいです。
そして、もう一度文で表現させてあげてください。

次は、「たつ」と「すわる」「きる」「かぶる」「はく」と「ぬぐ」「とめる」と
「はずす」といった配列絵カードを使います。
どこにすわりますか?
どこからたちますか?

と問い、文に表現できたら、必ず逆からも問います。

いすにどうしますか？

いすからどうしていますか？

と問い、文に表現させます。

次の段階では、先の動作絵カードを使って、5W1Hをつけて、多語文にしていきます。

「どこへ」はしていますか？

「だれが」あるいていますか？

「なにを」たべていますか？

「どこで」あそんでいますか？

文にしやすいように問いに対応した「助詞」を置いて、表現させます。

同じ時期に、動作絵カードも使い始めます。

「あるく」「はしる」「すわる」「のる」「たべる」などの動作絵カードを使います。

絵カードを見せて

「なにをしていますか？」

と問います。

子どもが

「あるいてる」

と答えます。

「そう、あるいているね。」

「じゃ、だれがあるいているのかな。」

と問います。

答えが返ってこなければ、

「男の子かな、女の子かな、」

と問い、答えを促します。

次は文で表現させます。

「だれが？」

と問い、「が」の文字をおきます。

「おとこのこ」と答えるとすぐに、

「が」を指差し、読みます。

「何をしていますか？」

と問い、

「あるいて いる。」

と答えるのを待ちます。

「おとこのこが あるいて いる。」といった文にして復唱させます。

単語カードに書いて、復唱しやすいようにします。

ほかの絵カードでも同じように一般化するように促します。

先に「えんぴつ」や「かさ」で教えた表現法で次のものを説明できるように指導します。

「クレヨン」「けしゴム」「ながぐつ」「ぼうし」の絵カードを使います。

「えんぴつは じを かく ものです。」

文章カードを見せて「えんぴつ」を「クレヨン」に置き換えて、読みます。

「クレヨン」は じを かく ものです。

字もかくけれど、何かをかくときに使うよね。

と問います。

答えが返ってこなければ、

「幼稚園で何かをかくよね」

と問い、

「えをかいた」という経験を思い出させます。

それで、

「クレヨンは えを かく ものです。」

と一般化した表現をしていきます。

同じように

「けしゴムは じを けす ものです。」

「ながぐつは あしを めらさない ものです。」

「ぼうしは あたまに かぶる ものです。」

と表現していきます。

6歳のころになると、そのものの用途を説明し、一般化した表現ができるようになります。

「えんぴつ」の絵カードを見せて、「これは何ですか」「お話して」と問います。

「色鉛筆を買ってもらった」

「字を書く」

と答える子がいます。

「かさ」の絵カードを見せて、同じように問うと、

「青いのをもってる」

「雨の日にさす」
「ぬれないようにさす」
と答える子がいます。
「えんぴつは字を書くものです。」
「かさは雨にぬれないようにさすものです。」

経験だけを答える子に、用途やより一般化した答えを教え、表現するように教えます。

子どもは2歳代のころから

「大きい」と「小さい」「長い」と「短い」など反対概念を獲得していきます。
ものに名前をつけ、同じ名前のものでちがいを認識し、反対の概念を獲得していきます。
5歳ころになると、四角を「大小」に書き分けることができるようになり、その中間も芽生えてきます。

6歳ころには、正面横向きの人物画も描くようになります。

このことはイメージが育ち、視点の移動ができることをあらわしています。

言語性を伸ばすために、こんな指導もしています。

「ふね」と「あり」の大きさ比べをします。

- ・「大きいふね」を描いた絵カードと「小さいふね」を描いた絵カードで「大小」を比べる。
- ・「大きいふね」と「小さいふね」が1枚に描かれている絵カードで「大小」を比べる。
- ・「大きいふね」を描いた絵カードと「小さいあり」を描いた絵カードで「大小」を比べる。
- ・同じ大きさで描かれた「ふね」と「あり」の絵カードで「大小」を比べる。

絵カードにはいろいろあります。

次のように分けています。

- ・50音に分けてある絵カード。

これは、発音の練習で単語レベルまで指導してきた子どもにつかいます。

- ・食べ物や乗り物、日用品、動物などの名前をあらわす絵カード。

食べ物の絵カードでその色や好きな果物や嫌いな野菜を聞いていきます。

色や好き嫌いをつけると2語文、3語文になります。

- ・公園や遊園地、山、海などの場所や上下左右など位置を表す絵カード。

- ・家族や店屋の人、お医者さんや看護師さん、おまわりさん、消防士さんなど、人やその人の仕事をあらわす絵カード。
- ・桜やチュウリップ、ひまわりなどの花、雪だるまなど季節や時をあらわす絵カード。
- ・飲む、食べる、乗る、座るなど、うごきを表す絵カード。
- ・笑っている顔、泣いている顔、苦しんでいる顔、おこっている顔など表情を表す絵カード。
- ・登校し、ランドセルをロッカーにしまい、学習し、休み時間に遊び。給食を食べる学校生活の場面をあらわした絵カード。
- ・家に帰り、宿題をし、習い事に行き、夕飯の準備をし、夕食を食べ、歯を磨き、寝る家庭生活の場面をあらわした絵カード。
- ・ウサギと亀が競争して亀が勝つお話の展開をあらわした配列絵カード。

子どもの言語発達に応じて使い分けています。

会話では、助詞を使わなくても通じます。

誤って使っても通じます。

しかし、ここにもう一つ条件が加わると、話しは通じにくくなります。

たとえば、

- ・自分だけの経験を話すときに
- ・はじめての人と話すときに
- ・たくさんの人の前で話すときに
- ・話すスピードが速くなると
- ・発音に誤りがあると
- ・長く話すと

などの条件が重なると、通じにくくなります。

ことばの教室では、先生と子どもとの間でことばの問題が改善するように取り組みます。

家庭では、親御さんと子どもとの間でことばの問題が改善するように取り組んでください。

そうすることで、問題の改善に一步近づきますから。

3才代の子どもは、自分の世界を表現しはじめます。

お母さんやお父さん、身近にいる大人に自分の表現を理解してもらえたら喜びます。

同年齢の子どもも求めはじめます。

しかしまだ、集団生活に対応できるほど発達はしていません。
身近にいる大人が、子どもと対一の関係を作ることが必要です。
そこで子どもの表現を受け入れ、いっしょに楽しい時間を過ごすことです。
身近にいる大人との関係に支えられて、友達の中に入っていきます。

ひらがな文字を読みはじめると、次は書くことに取り組みます。
ひらがな文字を読むときと同じように、行ごとに書く練習をしていきます。
ほぼ書けるようになると、次は「日記」を書くように練習します。

「朝、家で何をしていた？」

と聞きます。

「マンガ、みてた」

と答えれば、それを原稿用紙に書きます。

まんがみてた

「よくできました。

ひらがなを覚えたから、話したことを書けたね。

がんばったね。

文の終わりには、必ず「。」をつけてね。」

と子どもに声をかけます。

そのあと、

「日記を書かせてあげてください。

短い文でいいから書かせてあげてください。

一日の出来事のひとつにしぼって、お母さんが聞いてあげてください。

子どもがそれに答えて、それを書くようにしてください。

たとえば、

きょうは、だれとあそんだの？

くん

くんとどうしたの？

あそんだ

とやりとりのあと、書くようにしてください。

ひらがな文字のまちがいを訂正するだけでいいです。

書いたことをほめてあげてください。」

とお母さんに話します。

文を書いても

「何を書いているのかわからない」
と評価されてしまい、書くのをいやがる子がいます。
確かにその子が書く文は
主語と述語が対応していなくて、
助詞の使い方、
修飾語の使い方、
接続詞の使い方が誤っています。
教科書を読んで、
「だれが、出てきましたか？」
「その人が何をしたのですか？」
と問います。
その答えをつないで、短い文で表現するように指導します。
短い文をつなげることで、主語と述語が対応していないことに気づきやすくなります。
助詞の誤りも少なくなります。

ことばは約束事です。
りんごのことを「りんご」と言おうと約束しているんです。
しかし、幼児期の子どもは正しく発音できません。
誤って覚えていることもあります。
それで、「ご」だけを言って、「りんごがほしい」と表現する場合があります。
大人が、その子どものことばを理解して、対応することが大切です。
「そう、りんごが食べたいんだ。」
と答えてあげてください。
思いが伝わったことを、子どもに伝えることで、子どもはことばに関心をよせていきます。
りんごと子どもの目とお母さんの口元を直線で結んで、「りんご」と言ってあげてください。
そして少し模倣するのを待ってあげてください。
赤い皮をむいて、一緒に食べ、子どもの目を見て、笑顔で
「りんご おいしいね。」
と声をかけてあげてください。
そんな積み重ねが、子どものことばを育てていくように思います。

3歳代の子どもは、ことばを学習しています。

しかし、話す器官の発達が未熟なんです。
話そうとするスピードでは動いてはくれません。

わかることばも増えていきます。
しかし、それを使って表現するほどの力も育っていません。
また、自分でできることが増えていきます。
それまでお母さんが「・・・して」というと、その通りしていたのに、「いや」といい始めます。
それで、子どもにやらせてみると、できないことが多いです。
お母さんの手助けを必要としています。
不安定な時期なんです。
この時期の子どもは、できることが増えていくんですが、できないことがたくさんあります。

ひらがな文字を読むように取り組むときに、行ごとに読めたあとに、
列ごとに読むことを目当てにすることがあります。
あ列のひらがな文字を並べて、ことば集めをします。
一字では か、は、
二字では かさ、さか、かた、たか、たな、なた、はな、はら、わら、
かま、さら、かわ、
三字では、からだ、さらだ、
四字では、からから、ぱかぱか、
と並べて、読むように指導します。

子どもは、発達とともに自分の世界、親との世界、友だちとの世界を形作っていきます。

始めはほとんど寝ていた赤ちゃんが、動くものに目を動かし、首を動かして追って行きます。
やがて手を動かしてつかみます。
はいはいをし、立ち、歩くことで自分の世界を広げていきます。
いつも身近にいてくれる大人を知り、人見知りが始まります。
その大人の後を追ひ、やりとりをし、関係を深めていきます。
こうして親との世界をつくります。
そして親との関係が深まることで、この次の友だちとの世界をつくっていきます。

親との世界でいっぱいエネルギーを溜めて、同年齢の子どもの世界に飛び込んでいきます

子どもは2・3歳くらいから絵本を読んでもらうのを楽しみにしています。
絵本の絵だけを見て、自分のことばで表現し、お母さんとやりとりをはじめます。
やがてお母さんが子どもに読み聞かせをします。
書きことばを耳にした子どもは、話の内容にひたっていきます。
それは、絵だけから自分のことばで表現していた以上のことをイメージできるからです。
このようにして、文字への関心を深めていきます。

大日本図書の「乳幼児のことば」を参考にしました。

こうして書いていると、自分の仕事が少しずつまとまってきます。
うれしいものです。
この文字はいつごろから習得し始めるのだろうか
子どもがひらがな文字に関心を示すのは、個人差が大きいようです。
3歳ごろから関心を示す子もいますが、だいたい4歳ぐらいから関心を示すようです。
はじめは自分の名前の文字に関心をもちはじめます。
そして道を歩いていると、自分の名前の文字を探し出します。
知らない文字を見れば「あそこになんて書いてあるの」と聞くようになります。
一文字でも読めると、ほめてもらえることで文字への関心は高まっていきます
90パーセントの子どもは、小学校入学までにひらがなを読めるようになっています。
そして小学校の6年間で、書きことばを通して学習し、経験したことを書きことばで表現できるようになります。

皮をむくようにして、口に持っていきながら「(みかん)を たべる。」
先生がみかんを食べています。ぼくも食べたいとき「ぼくも (みかん)を たべたい。」

好きな食べ物を言うとき「ぼくは (みかん)が すきです。」
比べると「りんごよりもみかんが好きです。」
好きな食べ物がたくさんあって、「ぼくは みかんも すきです。」
その様子を見て「おかあさんが (みかん)を たべています。」
たくさんの食べ物の中で「これが ぼくの すきな (みかん)です。」

きのうの昼食の後「ぼくは すきな（みかん）を たべました。」

食べている理由をつけて「ぼくは のどが かわいたので みかんを たべました。」

のどが渴いている弟に「ぼくは すきな（みかん）を おとうとに あげました。」

いろいろな表現方法をリピートしてもらいます。

短期の記憶ができることを願ってリピートしてもらいます。

一度やったから、何回か指導したからと言って、いつでもどこでも正しく使えるとは思っていません。

聴覚的な刺激になればと思い、リピートしてもらいます。

生理的欲求

乳児は、食べたい、眠りたい、休みたいなど生命活動に必要な欲求を泣くことで表現します。

母親はその表現に答えて、ほほえみながら、ミルクを与え、やさしくダッコし、あやします。

母親のこうした行動により、乳児は母親への愛着を育てていきます。

安全欲求、愛情の欲求

生後6、7ヶ月もすると、母親以外の人に抱かれると、不満な顔をしたり泣き出したりします。

母親以外の人を区別し、嫌います

このことは、母親への愛着が育ってきている証拠なんです。

やがて、時間がたつと、母親の周りにはいる父親、祖母、祖父も愛着の対象となります。

家族の中で、信頼の輪を広げていきます。

成就の欲求、独立の欲求

また母親への愛着が育つと、母親の行動を模倣しはじめ、見慣れた人の身振りを模倣し積極的なかわりをもとうとします。

自分で食事をしよう、衣服をぬごう、着ようとしはじめます。

何度も、くり返し、練習します。

大人が手伝おうとすれば、「いや」といって抵抗もします。

一人でやらせると、失敗することも多いです。

しかし、一人でやりたいと練習し、一つひとつのことを獲得していきます。

承認の欲求

こうして、基本的生活習慣が身についてくると、身の回りのことを自分で処理

できるようになります。

「自分にもこれだけのことができるんだ」という自信が生まれてきます。

親の指示に「いやだ」「できない」と逆らうことも多くなってきます。

自分を意識し、自己主張しているのです。

夏休みです。

一日に一回、今日は子どもがどんな欲求を表現したか、ふりかえってみてください。

聞き取りの弱い子どもに、一音を聞き取り、答えることをねらいに取り組みます。

場面絵カードで質問し、

はじめは場所を答えさせます。

次は「で あそびます。」「へ いきます。」「に おきます。」と書いた単語カードも見せて、問います。

子どもは問いに対応した単語カードを選び、場所をつけて答えます。

そして「で」「へ」「に」と書いた文字カードを見せて、問います。

子どもは問いに対応した文字カードを選び、場所とどうするのかをつけて答えます。

念のために、「あそびます」「いきます」「おきます」と書いた単語カードを見せて、問います。

子どもは問いに対応した単語カードを選び、場所と「で」「へ」「に」をつけて答えます。

～で遊びます。このときの「で」は場所を表します。

～へ行きます。このときの「へ」は方向、方角をあらわします

～に置きます。このときの「に」は場所、方向を表します。

ややこしいのが、「へ」と「に」です。

「～へ行きます。」「～へ置きます。」と会話では使っています。

きっと、使い分けていたことがあったのでしょう。

教室では、次のことを教えます。

どこで遊びますか？～で遊びます。

どこへ行きますか？～へ行きます。

どこに置きますか？～に置きます。

それぞれの問いに、対応した答え方をすよう教えます。

物を目で追い、そのものに手をのばし、にぎり、もったままふりはじめます。
ものへの興味や関心がエネルギーの一つなのでしょう。
人見知りをし、いつも近くにいてくれる人の後追いはじめます。
守られていることでエネルギーをためていきます。
子どもが大人のまねをし、近くにいる人がその様子を見て対応します。
自分ですると主張し、なかなかできないけれど、自分でしていきます。
周りにいる人がそれを見て「できたね」と声をかけます。
学びつづける中でも、エネルギーを補充していきます。